

2024年10月20日

「希望の計画」

エレミヤ書 29:10-14

早川 真牧師

神はエレミヤの手紙を通してユダの人々にバビロンの土地に腰を据えて住むように、そしてその町の人々の平安を祈りつつ暮らすようにと命じておられます。自分たちを捕虜として捕らえ移した敵の土地に根付き、敵のために祈るということは情動的に難しいことであつたに違いありません。むしろ一日も早くかつての土地に帰りたいたいと言うのが彼らの切実な願いであつたことと思います。

それは私たちの人生とも重なります。私たちの人生の中にもそれぞれにバビロン捕囚のような時期があります。自分の願いと違う、苦難や困難の中に置かれる、暗い期間です。しかしそのような期間の中でこそ私たちは心を尽くして主を呼び、主のもとに来て祈り求め、ついに主に出会います。

約束の土地から追いやられ、バビロンに捕囚として連れて行かれるということはユダの人々にとって神の災いの計画としか思えない出来事だつたに違いありません。しかしこの出来事は災いのためではなく、将来と希望を与える計画であるのだと語られています。

私たちは地上にいる間は寄留者であると聖書に書かれています。それは、私たちの国籍がもはや地上にではなく天にあるからです。ユダの人々が遠いバビロンの地で腰を据えて生活したように、私たちもこの地上において神が置かれたそれぞれの場にしっかりと腰を据え、その町に神の平和を祈りつつ歩んでまいりたいと思います。そして神に愛され、将来と希望を与えられている者として、私たちに与えられた平和の計画をその生涯を通して証ししていきたいと思います。